書式 7

助成番号	13 － A11

成 果 報 告 書

記入日 2016 年 4 月 18 日

氏 名 臼杵悠	渡航先国名 ヨルダン	所属機関 ヨルダン統計局

研究テーマ：中東における非産油国ヨルダンに見る移民と国家経済の発展

研究期間 ： 2014 年 4 月 ～ 2016 年 3 月

研究成果（概要）

ヨルダンにおける、a)実際にヨルダン国内で生活する移民家庭出身の若者の自己認識の把握、b)統計資料の総体的な収集、c)アンマンを分析する際のトピック（バス路線）の発見とアンマンの特殊性の確認、の３点に成果があった。

研究成果（詳細）

本研究の目的は、非産油国であるヨルダンの経済発展の背景として特異な形態による移民流入に着目し、同国における人口移動の時代的・空間的全体像を示し、その経済面での機能を明らかにすることである。特に滞在中の現地調査では、周辺の地域紛争によってヨルダンに流入する移民の存在自体が、この国家の経済的発展に寄与したのではないかとの仮説をもとに、統計資料ならびに質的なフィールド調査を行った。その結果、以下の 3 点の成果を得た。

［a. 移民家庭出身の学生の自己認識］

多くの知己を得た中で、特にヨルダン在住が長期化しているパレスチナ移民の 2 世、3 世にあたる若者たちの自己認識が特異なものであることが明らかになった。とりわけ大学生の意識は興味深く、彼らはパレスチナ人であることを日常生活で強く主張することはなく、あくまでヨルダン人として生活しているとの回答を多く得た。ただし、パレスチナ出身であることを忘却したわけではなく、質問を受ければ父母、または祖父母の出身村や町の名称を答えることができた。そもそもヨルダン人口の 6 割以上を占めるとされるパレスチナ人移民の多くは、ヨルダン建国以降に起こった隣国イスラエルとの紛争によりヨルダンへ避難した人々である。彼らの大多数がヨルダン国籍保持者という特殊な事情があるものの、パレスチナへ「帰る」ことが前提でのヨルダンへの移動であった。その影響もあり、これまでの研究ではパレスチナから移住してヨルダン北部と都市部に集中しているパレスチナ人に対し、ヨルダンにそれ以前から居住する南部地域のアラブ人（ヨルダン人）を二項対立的に描き出し、これをヨルダン国内政治における対立軸とした分析が多かった。しかし、その後の 2000 年代におけるイラク移民（難民）、そして昨今のシリア移民（難民）の流入もあり、ヨルダン人対パレスチナ人という対立軸での分析はすでに難しくなっている。そのため、ヨルダンで生まれ、ヨルダンでの生活しか知らない若者層が多数となったパレスチナ人は、むしろアイデンティティーの重層性、より正確に述べればヨルダン人とパレス

チナ人を使い分けるという表と裏の二重性が生じていると捉えることが妥当であるとの結論が導かれる。調査者自身が女性であるために、特に女子学生からこうした回答を得たことは重要な成果であったと考える。

この視点は、2015 年 1 月のイスラエルおよびパレスチナ暫定自治区での調査にも多くを負っている。パレスチナ暫定自治区で会った人々は、第一にパレスチナ人（難民）であることを強く認識し、それを表現することを当然としていた。一方でヨルダン国内の地方都市サルトでは、ナーブルスィー家（ナーブルス出身者）、ハリーリー家（ヘブロン出身者）といったパレスチナのヨルダン川西岸地区の都市に由来する姓を名乗りながらも、ヨルダン建国以前に移動しているためにパレスチナへの帰属意識を主張する人々は少なかった。こうした視点は、現代中東研究において重要な位置づけを与えられてきたパレスチナ問題の理解にも新たな成果を加える可能性がある。

[b. 統計局における統計資料の閲覧と分析]

統計局に所属することによって、統計局図書室に保管される統計資料を重点的に参照、分析することができた。特に、インターネット上で公開されていない建国直後の 1952 年センサス（アラビア語資料）や 1994 年センサスの補足調査データなどを参照することで、ヨルダン国内における移民と経済発展の関係性（因果関係）を時代的に長期間にわたって明らかにする可能性を持つ資料を入手することができた。ヨルダンは周辺地域における紛争や情勢不安によって、人口が著しく、かつ無計画に増加してきた国家である。周辺諸国での戦争・紛争を契機としたヨルダンへの人口流入がたびたび起こり、突発的かつ急速な人口増加がヨルダンでは見られた。その人口増加のタイミングや人数はすでに先行研究でも知られていたが、センサス資料を参照することによって、より詳細に職種バランスの変化、年齢構成の差異、その後の国内移動の様子などを分析することができるようになった。調査者の主な関心は、最新の 2008 年および 2010 年の世帯調査記録の分析を通して、ヨルダンという国家の特殊性と普遍性を中東諸国のなかで比較し、位置づけることにある。その際に、建国以降の長い時間軸の変化を把握する必要性を調査者は痛感しており、統計局に保管される資料の参照によって、さらなる研究の発展の糸口をつかむことが出来た。

統計局局員との議論も非常に示唆的な内容に富んでいた。統計調査の実施の様子や統計報告書に掲載されない調査結果など、滞在したからこそ知り得た情報が数多くあった。例えば、調査者が滞在中に行われた国勢調査（2015 年 11 月末）では、残業という概念がほぼないヨルダンでも局員が労働時間を延長し、休日出勤や 1 日中統計局に缶詰になることもあったという。その期間中には調査者自身が統計調査の対象となり、データの質問項目や調査方法、戸別訪問調査の様子などを自ら体験することができた。この経験は、センサスの統計データの分析において、どのような点に留意して議論を展開するかという点で貴重なものとなった。戸別訪問と言っても、同時期に調査対象者となった知人との情報交換を通して明らかになったことは、家主（大家）がすべての住民の情報を代理で返答している場合や日本のような完全な戸別訪問、また（隣人による情報提供があったのか？）戸別訪問をまったく受けた認識のない者など、さまざまなパターンが認められたことである。この視点を得ることによって、統計資料を単なる数字としてではなく、そこに関わる調査員（多くは教育省から派遣される教員だという）を含めて、より立体的に理解することが期待される。

［c. 首都アンマンにおける日常的な社会経済生活の解明］

調査者が滞在した首都アンマンは、移民の大量流入によって開発計画なく発展した都市であり、ヨルダン国内全体の人口の約 4 割が居住している。先行研究においては、この都市の「無計画性」の特徴として、住宅不足と水問題に焦点が当てられていた。しかし、実際に 2 年間滞在するなかで、調査者は公共バス路線に着目する分析という新たな着想を得た。アンマン内部を走る公共バスは、旅行者や短期滞在者はまず利用することはないが（公式の路線図がなく、乗り場も不明確であり、乗客は無分別にバスを止めて降車している。また見るからに車両の整備に不安のある外見をしているものも多い)、調査者はヨルダン人女子学生がバスを日常的に利用していることから、アンマン市内のみならずヨルダン国内の移動では公共バスを用いる生活を送った。その結果、バス路線の発展が、実はアンマンという都市に流入する移民や難民が居住する地域の出現や拡大に伴ったものであったことが明らかになった。簡単な分析を示すならば、移民や難民たちが避難した居住地内部だけで生活することなく、都市内部および都市間を日常的に移動する傾向があること、そしてバス路線の少ない地域には中産層以上の比較的裕福な人々（中には資金を持っている移民も含まれる）が自家用車を用いて移動する社会が発展していることが明らかになる。センサスのデータとの照会によって、こうしたバス路線から見えるアンマンという都市の「無計画性」と都市空間内部の多様性を明らかにすることができる。この成果はすでに『パレスチナを知るための 60 章』（明石書店・2016 年 4 月刊行）にコラムとして発表し、今後より議論を精緻化したうえで学会などでの報告を検討している。

アンマンという都市の特異性（と普遍性）については、2015 年 6 月にレバノンの首都ベイルートに短期間滞在するなかでも視座を深めた。イスラムの断食月（ラマダン）をアンマンとベイルートの二つの都市で経験した結果、アンマンが調査者の予想よりもはるかにイスラム色の強い生活空間であることが認識された。アンマンは、湾岸アラブ人の「避暑地」（十分に暑いが）として有名であり、湾岸諸国特有の白い長衣のシャツを着た家族連れと遭遇する機会が多かった。特に印象深かったのは、免税店でそうした家族が、上限ギリギリまでのたばこビール、ウォッカなどを購入している姿であった。したがって、調査者はヨルダンがアラブ諸国のなかでも比較的イスラム色が穏やかであるとの認識を持っていたが、ベイルートでは日中の断食の時間でもレストランが開店し、食べ歩きなどの光景も見られ衝撃的であった。一方で、アンマンでは食品関連の店舗の日中閉店が見られるなど、断食は徹底して行われていた。タクシーなど交通機関もサービスを停止する時間が長くなるため、ヨルダンへの帰国時には市内の移動ですら困難であった。

北部イルビド（イスラエル国境近く）の地方村落「カフル・マー」に滞在した際は、首都アンマンから祖父母の家である村の邸宅に親族の数家族が集まり、大変賑やかな様子が見られた。アンマンに居住するすべての人物が地方に「実家」を持つわけではないが、国内の住民移動の一例を見ることが出来た。

以上の成果をあらためて要約すれば、a)実際にヨルダン国内で生活する移民家庭出身の若者の自己認識の把握、b)統計資料の総体的な収集、c)アンマンを分析する際のトピック（バス路線）とアンマンの特殊性の確認、の３点となろう。この留学によって得られた成果を、統計資料（特にセンサス）の分析において生かし、またそれを成果として報告することに今後は尽力していきたい。

留学中の生活・研究でのトピックス

全主要紙の一面にカサースベ氏

留学中の最も大きな事件としては、2015 年 2 月に明らかになった空軍パイロット・カサースベ氏の「イスラム国」（IS）による焼殺である。日本人２人の人質事件と同時に生じたカサースベ氏とヨルダン収監中のリシャウィ死刑囚の交換交渉は、日本国内でも大変注目されたと聞く。カサースベ氏はヨルダン国内でも有力部族の出身者であり、その父親が（解放交渉に応じなかった）国王に対する批判を行う姿を新聞で見たことが印象的であった。一方で、数週間と経たぬうちに国王とカサースベ氏の父親が抱擁する様子が報道され、ヨルダンという国家が成り立つための王室と地域住民との関係性のしたたかさを見せつけられた思いであった。

また、日本とヨルダンとの関係性を強く意識した２年間でもあった。JICA のプロジェクト関係者（日本人）のみでも 100 人以上が常時ヨルダンに滞在しており、音楽や体育、文化交流や技術支援など、多分野にわたって貢献をしている。ヨルダン大学にある語学学校のリスニング機器などが日本からの支援であったのに加え、首都郊外の都市サルトの博物館は、それ全体が JICA のプロジェクト対象となっており、調査者と同世代の若者たちが交流の最前線に（文字通り）身を投じている姿が印象的であった。また、ヨルダン大学の日本語クラスの学生にはヨルダン人のみならず、マレーシア人など様々な国の学生が大変に熱心に勉強をする姿が見られた。

蛇足ではあるが、ヨルダン大学の学生寮の電話が Panasonic 製品であったことに、到着間もない頃に親しみを覚えた。日本製品（特に自家用車や電化製品）に対する信頼は概して高いものであるが、一方で価格の問題から手が出ないとの声も聞かれた。いまだ質よりも価格を重視するヨルダン（サウジアラビアなどとは違う）は、この点から経済的に発展途上にあることを実感した。

今後の社会貢献

ヨルダンの女子学生達と

中東地域は、残念ながらシリア内戦や IS など、否定的な観点から注目される地域になってしまった。こうした地域に長期間滞在した者として、研究での社会的還元はもとより、この中東地域全体に対する日本社会の理解を、より日常生活や文化、人的交流などの側面から支えることができればと考えている。ヨルダン国内では首都のアンマンに始まり、地方都市のサルト、イルビド、ザルカー、アカバなど、すべての県に足を運んだことで、都市生活と農村生活、地方都市での生活などを具体的に理解することができた。また、そうした地域の住民たちが、戦争や紛争を忌避し、IS のような動きに批判的であることも、それぞれとの会話のなかで理解された。そうした等身大の中東の人々の姿を日本社会に対して発信していくことは、今後さらに交流が深まる可能性のあるなかで必要不可欠であると考えている。中東を遠い地域としてではなく、日本社会に親しみのある形で紹介していくことで、頂いた留学助成を私個人を通して社会に還元することに努めていきたい。